学校教育実践コース（家政教育専修）・生活環境コース，家族関係学

当事者意識をもって多面的に家族をとらえるために

家政教育・藤田昌子

１．授業の概要

（１）目的

本授業は、誰にとっても身近な存在である家族について、客観的に、また科学的にとらえ、急速に変化し多様な様相を示す現代の家族現象を多面的に把握し、問題解決に取り組む態度を養うことを目的としている。対象は、３回生であり、主に中学校家庭科および高等学校家庭科の教員免許の取得をめざす学校教育教員養成課程・生活環境コースの学生、コース選択科目（人間と生活に関する科目）として生活環境コースの学生が履修している。

（２）授業スケジュール

第１回　家族に関する基礎理論
第２回　家族の歴史的変化
　　(1)伝統家族、近代家族の特徴
第３回　家族の歴史的変化
　　(2)現代家族の特徴①
第４回　家族の歴史的変化
　　(3)家族の形態・機能の変化
第５回　家族の歴史的変化
　　(4)ジェンダー､セクシュアリティで読み解く家族
第６回　各ライフステージにおける家族
　　(1)結婚の意味とパートナー関係
第７回　各ライフステージにおける家族
　　(2)子育てと親子関係
第８回　各ライフステージにおける家族
　　(3)高齢期の家族関係
第９回　前半まとめ
第10回 現代家族を取り巻く問題とサポートシステム
　　(1)家族を取り巻く諸問題について
第11回 現代家族を取り巻く問題とサポートシステム
　　(2)シングルペアレント、離婚について
第12回 現代家族を取り巻く問題とサポートシステム
　　(3)子育て支援について
第13回 現代家族を取り巻く問題とサポートシステム
　　(4)ドメスティック・バイオレンス、世界の家族などについて(公開授業)
第14回 現代家族を取り巻く問題とサポートシステム
　　(5)結婚・妊娠について
第15回　総括・評価

（３）授業を行う上での工夫

家族に一応の興味・関心があるものの、家族に関して深く考えたことがない学生が多い。また、主観的に家族を捉えていたり、標準的な家族像しか知らず、家族が抱える問題についての理解が薄い学生が多い。特に、それらの問題に関して、当事者意識をもって多面的に捉えることができる学生はほとんどみられない。よって、視覚教材『おしん』『誰もしらない』や新聞記事を用いたり、グループワークやロールプレイングを活用したりするなどの工夫をした。また後半では、個人で家族に関する問題とそのサポートシステムを考察し、研究レポートの作成､発表､意見交換をとおして、家族現象を多面的に把握し、問題解決に取り組む態度を養うことを目指した。

２．授業公開と授業カンファレンス

（１）公開授業実施日と参加者

公開授業は､2009 年７月 15 日（水）３限目に、授業カンファレンスは公開授業終了後に 201 教室にて行われた。公開授業・カンファレンスには、家政教育講座の１名の先生にご参加いただいた。授業参加学生は、23 名であった（履修者 24 名）。

（２）公開授業の内容

第 10～14 回は、前半の講義を踏まえて、現代家族に関する課題とその課題を解決するためのサポートシステムについて、文献や統計資料の分析に基づき、研究レポートの作成、口頭発表、意見交換を行う内容である｡学生自身でテーマを選び、まとまりのある内容ごとに発表日を決定した。１日に５名が発表し、その５名１グループとして、交代で発表の運営にあたらせた｡運営は､司会（１名)、タイムキーパー（２名)、記録（２名)、指定討論者（全員）とした。授業の流れとしては、前回の補足説明（事後課題）を終えた上で、本時の発表に移り､発表７分､質問･意見交換５分とし、全員の発表が終わると、当日の発表のまとめを行うこととした。当初の計画では、発表 10 分、質問・意見交換５分を予定していたが、予想以上の受講生がおり、また質問や意見交換を重視していたため、発表時間を短縮することとした。

公開授業当日の発表内容は、「日本と中国の家

族観の比較」「世界の家族のあり方」「ドメスティック・バイオレンス」「子どもへの虐待について」「老老介護」であった。

（３）授業カンファレンス

公開授業にご参加いただいた１名の先生に、引き続きご参加いただき、授業カンファレンスを行った。カンファレンスで出た主な感想・意見としては、①学生に運営させるのはよいが、司会の役割を決めるなど､運営上の配慮が必要ではないか、②前回の発表者で答えることができなかった質問を、事後課題にして調べて補足説明をさせるのはよかった。しかし、質問の内容をしっかり理解しておらず、質問の意図とずれた説明をする学生もいたので、事後課題については事前に確認をしてはどうか、③内容に関して、教員が補足説明やまとめはいつ、どのように行うのか、④関連する科目との内容の調整はどうするのか､などであった。

３．次年度への課題

上記の感想・意見への回答、ならびに次年度への課題は次のとおりである。①については、それぞれの役割を決め、学生には口頭でも文書でも伝えている。しかし、今後は進行がスムーズにいかない場合などのフォローをするように努めたい。②研究レポートをより質の高いものにするためにも、今後は事後課題について、授業終了後に再確認するように改善したい。③毎回の研究発表ごとに補足説明やまとめを行っている。しかし、学生の研究発表が伸びた場合には、その時間がほとんどなくなってしまうこともあり、課題である。最終授業に総括の時間を設けているが、やはり個々のテーマごとのまとめが効果的であることから、時間配分などの工夫をしたい。また、重要事項は何度も繰り返して復習することで、定着を図りたい。④まず、家庭経営学との関係であるが、本授業の対象である３回生は、２年次に前任者から講義を受けている。引き継ぎをしたものの、細かな内容の把握までは難しく、家庭経営学との内容の調整が難しかった。しかし、次年度からは、授業者が両科目とも担当するので、この問題は解決する。次に、同じ生活環境コースの選択科目として同時期に開講されている｢生活主体の形成と環境｣との関係である。子育て支援に関することは、内容が一部重複するため、担当者と打ち合わせを行い、授業内容を検討していきたい。

最後に、学生の振り返りアンケートをもとに、授業の達成度と今後の課題をまとめたい。

「本授業において学んだこと」として､「家族とは…について、そんなに深く考える機会は今までになかったので、考える機会ができたことがまず大きな学びだったのではないかと思う。(後略)」「この家族関係学という授業は、自分にとってとても有意義な時間になりました。『家族とは何か？』というとても大切なことを今まで考えたこともなく、家族の存在を当たり前に感じてきました。(中略) 自分のような幸せな家庭だけでなく、『誰も知らない』で観たような家族もたくさんいると思います。自分の生活している範囲の事しか考えていなかった自分が恥かしくなりました。もっとたくさんの人が広い範囲に目を向けることによって、生活しやすい空間づくりになるのではないでしょうか。(後略)｣｢無戸籍児については､家族関係学を学ぶまでは、テレビの中の話だと勝手に思い込んでいました。『誰も知らない』を観て、こんなにも簡単に無戸籍児が生まれるのかと感じてからは､全く人ごとには思えなくなっています。このようなケースだけでなく、離婚によって生まれるケースも少なくないことを知り、自分にもこの問題が振りかかる可能性があることを改めて感じました。(後略)」などがあげられた。そして、「本授業を受講し、自分自身のなかで変わったこと（認識や行動など)」についても､「自分にこれから起こるかもしれない問題なんだと思えて、授業中も主体的に考えることができたと思います。」というように、標準的な家族像のなかでしかとらえられていなかった家族の実態・課題を、当事者意識をもって多面的に捉えることができるようになっている学生もみられた。

また､「みんなの研究発表を聞くなかで､自分の中で共感できる点とそうでない点があり、疑問なども多く出てきた。それらについてのことをニュースなどで見かけると真剣に自分の知識と照らし合わしながら考えることが多くなった。様々な社会的問題に関心をもつようになり、自分なりに問題解決の方法を考えようとしている｡」｢研究レポートで行政の支援についての発表が多々あったので、ニュース番組やホームページで援助の方法や助成金について注目してみたり、自分で調べるようになった｡」｢本授業で、社会に対する疑問や矛盾を感じ、どうするべきか考える機会になったと思います。これからも考えていきたいと思いました｡」なども｢この授業を受講し、自分自身のなかで変わったこと」としてあげており、問題解決に取り組む態度もみられるようになった。しかし、これらがすべての学生でみられた変化ではないので、多くの学生が目標を達成できるように授業内容・方法を改善していきたい。